

かぜた
風立ちぬ

ほりたつお
堀辰雄

それらの夏の日々一面に薄の生い茂った草原の中で、お前が立ったまま熱心
に絵を描いていると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たえ
ていたものだった。そうして夕方になって、お前が仕事をすませて私のそば
に来ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合ったまま、遙か彼方の、縁
だけ茜色を帯びた入道雲のむくむくした塊りに覆われている地平線の方
を眺めやっていたものだった。ようやく暮れようとしかけているその地平線か
ら、反対に何物かが生まれて来つつあるかのように……

そんな日の或る午後、（それはもう秋近い日だった）私達はお前の描きか
けの絵を画架に立てかけたまま、その白樺の木蔭に寝そべって果物を齧じって
いた。砂のような雲が空をさらさらと流れていた。そのとき不意に、何処から
ともなく風が立った。私達の頭の上では、木の葉の間からちらつと覗いて
いる藍色が伸びたり縮んだりした。それと殆んど同時に、草むらの中に何か
ぼったりと倒れる物音を私達は耳にした。それは私達がそこに置きっぱなし
にしてあった絵が、画架と共に、倒れた音らしかった。